



高橋幸男

精神科医、
医療法人エスボアール出雲クリニック理事長・院長

認知症を 受け入れる文化、 そして 暮らしづくり

～ケアマネジャーに知って欲しい
認知症についての最低限の知識

私が心を痛めていることのひとつは精神科病院への認知症の人の入院が増えていることです。空いた病床を認知症の人で埋めているのです。誰が精神科病院へ入院させるのか、家族が、そう簡単に精神科病院に連れて行くとは、私には思えません。認知症の人や家族と一番コンタクトをとっている可能性のあるケアマネに勧められて精神科病院に向かう人が多いのでは、と思うようになりました。

そう思うようになったのは、ケアマネたちの認知症理解が乏しいと知ったからです。私の外来を訪ねてこられるケアマネに、「家族が大変だから認知症の人を何とかしてくれ」という要望を示す人が多いこと。なぜ認知症の人がBPSDを呈さざるを得ないのか、認知症の人の思いを知って対応を考えようとする人がほとんどいないということが気になっていました。

昨年ケアマネを対象にした講演をする機会があり、私が提示した事例や“からくり“の内容について、多くのケアマネから、「こんな話は聞いたことがない」「事例が良かった」などの意見をもらいました。反応自体は珍しいものではなかったのですが、「専門職」と思っていたケアマネのあまりにも新鮮な反応に驚きました。

ケアマネは認知症の人や家族と最も多く接する職種でありながら、認知症については「古い疾患中心の知識」しかないといっても過言ではなく、認知症の人の思いを知るような教育は受けていないのではと確信しました。

もちろん立派なケアマネも知っていますしすべての人ではありませんが、認知症の人や家族が暮らしやすい社会をつくるためにも、ケアマネこそ最低限“からくり“を知ってほしいと思い、『認知症を受け入れる文化、そして暮らしづくり～ケアマネに知って欲しい認知症についての最低限の知識』を上梓した次第です。